

新規就農者目白押しの レンコン産地

(株)れんこん三兄弟 & JA 土浦 (茨城県霞ヶ浦周辺)

高齢化・後継者不足で農家数の減少が続く農業界で、霞ヶ浦周辺のレンコン産地は新規就農者が目白押しである。基幹作物・コメ農業とは真逆の状況だ。レンコンは高収益、かつ収穫適期が長く休暇が自由に取れるため、若者に向けた産業だからだ。

茨城産レンコンは全国シェア5割、東京市場の9割を占める。品種改良、水圧掘り収穫のイノベーションが普及し、競争力ある産地に成長した成果だ。



叶 芳和
評論家

新規就農者が目白押しという珍しい産地だ。レンコン栽培は儲かるからだ。水田の借地料はタダ、稲作不向きの低湿地帯のハス田は5万円(10a当たり)。時代の変化は恐ろしいくらいだ。

霞ヶ浦周辺は日本一のレンコン産地で、全国シェア5割、東京市場の9割を占める競争力の高い農業だ。健康志向の高まりで、需要も伸び、成長産業の様相を呈している。「第2の成長産業」の可能性。長期停滞の農業分野で異彩を放っている。イノベーションの導入、農業経営者の行動を見たい。

① 茨城レンコンは成長産業

1990年代以降、全国的にはレンコンも衰退産業である。表1に示すように、全国の収穫量は9万tから6万tに減った。栽培面積も6千haから4千haに減少した。

これに対し、茨城県のレンコンは、栽培面積は大きな変化はないが、収穫量は2万tから3万tに増加した。その結果、全国シェアは20%から50%超へと上昇した。都道府県別では、茨城県が2万9千tとダントツで、2位徳島5千t、3位佐賀4千tである(2015年)。

茨城は日本一のレンコン産地である。その中心は霞ヶ浦周辺である。

表1 レンコン収穫量の推移(全国・茨城県)

(単位: ha、t)

	全国		茨城県		茨城県 シェア(%)
	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	
1975	5,540	89,000	1,580	19,600	22.0
1980	6,170	87,900	1,900	23,500	26.7
1985	6,090	92,100	1,760	21,100	22.9
1990	5,860	82,800	1,710	21,700	26.2
1995	5,360	79,200	1,720	26,800	32.8

	全国		茨城県		茨城県 シェア(%)
	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	
2000	4,660	75,300	1,630	28,500	37.8
2005	4,170	61,100	1,590	27,300	44.7
2010	4,010	60,300	1,610	28,000	46.4
2015	3,950	56,500	1,600	29,000	51.3

(出所) 農水省「作物統計」
(注) 収穫量は3か年移動平均。2015年は14、15年の平均。

第5回

新規就農者目白押しのレンコン産地 (れんこん三兄弟 & JA土浦 (茨城県霞ケ浦周辺))

湖岸に広がる低湿地帯だ。改良品種の導入、収穫のイノベーションが、霞ケ浦地区のレンコン産地の競争力を強くした。

図2は、レンコンの単収の推移を示した。茨城県の単収は70年代、80年代は全国より低かったが、90年代に急上昇した。一方、全国他産地の単収は低下トレンドである。90年代に鮮やかなクロスがみられる。その背景には二つのイノベーションがあった。

レンコンは品種が多い。もともと中国から伝来し、品種改良したものが普及している。関東では、千葉県長南町のレンコン生産者、金坂孝澄氏が育種した品種「金澄」(85年品種登録)が7割を占める。早生、極早生、晩生など早晚性の違い、浅い着生か深い着生か、収量の多寡、

肌の色、食味などで品種が分かれ、金澄系だけでも第1号から第43号(現状)まである。ほとんどが民間育種家によって育成されたものである。

霞ケ浦周辺の生産農家は、新品種の導入に積極的である。同一品種を作り続けると、レンコンの形状が長く変形したり、収量が減少したりすると言われており、新品種の導入に前向きなため、優良品種が短期間に普及していく。「金澄」は食味が良く、外観品質も良く、多収性、浅根性で収穫が容易なため、栽培面積が拡大し、茨城県産レンコンの90年代の単収向上につながった。

収穫のイノベーションもレンコン栽培の発展に寄与した。霞ケ浦周辺は水に恵まれており、収穫は水掘りである。湛水したハス田でジェット

図1 レンコン収穫量の推移

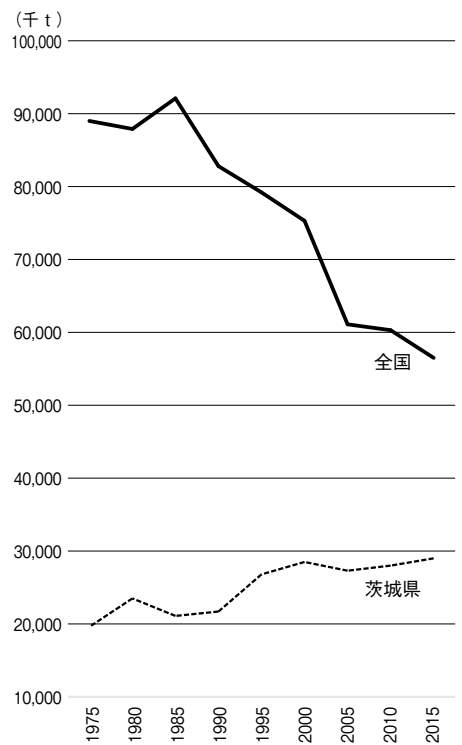
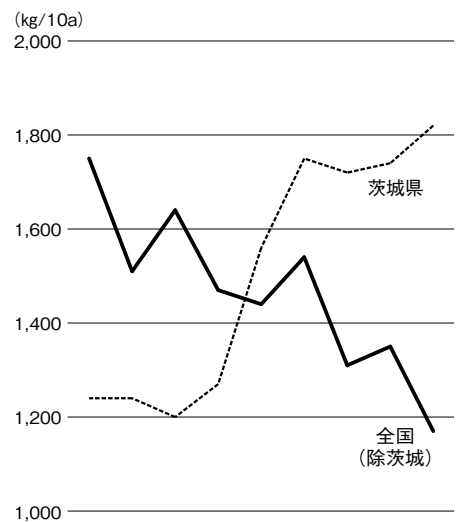


図2 レンコン単収の推移 (全国vs茨城県)



(資料) 農水省「作物統計」から筆者計算。3年移動平均。

本貴夫氏)は教師、次男(昌治氏)は飲食店、三男(昭良氏)は工場勤務だった。3人とも農業とは無関係。就職して外に出てから農業を見たとき、「当時は農業は悪く見られていた。同情されるような、憐みに似たようなものを感じた。そ

ポンプからの噴出水で土を動かしながら手掘りで掘り穫っている。70年代にホース式の水圧掘りが導入され、従来のクワ掘り(力仕事)に比べ生産性が2倍になった。大規模生産者はより省力的な自走式を導入しているところもある。



② 兄弟3人で新規就農

霞ケ浦の南部に位置する稲敷市浮島(旧桜川村)に、兄弟3人でレンコン栽培を行なっている農業経営者がある。規模拡大に成功し、11haの大規模である。

3人が就農したのは2001年だった。3人は学校卒業後、それぞれ別の仕事に就いていた。長男(宮

ここまで低く見られるのは歯がゆい」「世間が言うほど、食べられない訳でもないのに。それなら、実践してみたい」と思ったそうだ(貴夫氏)。

正月の帰省の時一緒になって、「実家を誰が継ぐか、どうするか」を話し合った。一番いいのは農業という結論になった。これから引退する人が出るので土地は集まる、食べていけない仕事ではない。「実家を続けながらプラス自分達も食べていけない」のは、農業ということになった。そして、嫁さんを従業員として使うのではなく、嫁さんが農作業しなくても続けられる農業を目指すことにした。農村の古い慣習を反面教師にしたわけだ。

当初は親の農業を手伝う形で就農した。親は機械利用組合を結成し3戸でコメ30ha(刈取り含めると60ha)、

レンコン3ha、水耕（ロックウール）切り花を経営していた。ハス田は転作事業で水田から転換したものの。霞ヶ浦の湖底を干拓した土地で低湿地帯、米づくりには向かなかった土地だ。

親の元でレンコン栽培を学んだ。自分たちの作った商品がどのように評価されているかを知りたくて、5年目（06年）に、地元の直売所に出荷した（「宮本兄弟農園」の別屋号で）。この時、好感触を得たので、07年には3兄弟がレンコン生産を任せ、独立事業部として生産を開始した。両親は稲作中心に、3兄弟はレンコン栽培に専念し、経理も別にした。

その後、10年に法人化した（翌年、農協脱退）。兄弟3人が役員であり、3兄弟の役員報酬は同額に設定した。収入も税金も完全に平等にした。法人化に当たり、社名を「株式会社れんこん三兄弟」とした。名は体を表すというが、この会社はどういう会社かがすぐ分かる。いい名前だ。取引でも得していると思われる。

兄弟3人は役割分担がある。長男は営業、次男は経理、三男は生産現場と担当が分かれている。次男、三男は単なる家族労働力ではなく、プロの人材として位置づけられている。これも日本農村の旧来の風習を脱した、新しい農業経営の型だ。

③ ペティ法則通りの発展 ― 販路開拓で6次産業化 ―

約10年前、独立事業部前は経営規模5ha、売上3000万円だった（05年）。いまは10ha（うち販売面積8ha）、売上7000万円（16年）に発展した。従業員数は役員3人、社員3人、研修中1人、外国人実習生1人、パート6人の計14人である（両親はノータッチ。コメ専作）。

一番の発展要因は、販売先の多様化で収益が向上したことである。それまでは農協に全量出荷していたが、卸売市場は価格が不安定なもので、飲食店への直販に営業活動を傾注し、販路の開拓を始めた。現状は、卸売市場40%、直売所30%、飲食店25%、小売店5%、食品加工会社数%である。高品質と安定供給を行なっているため、価格も高く、卸売市場の1.3倍になっている。

飲食店への直売は利幅が大きいだけでなく、プロの料理人からのリアルな声を生産現場にフィードバックできる。料理人たちの要求に応えるべく、製品を変化させたマーケティングが良かった。

売上7000万円への発展は、販路開拓、つまり6次産業化（1次＋2次＋3次）が大きな要因だが、「ペティ法則」通りの発展である。産業

構造論の最初の提唱者W・ペティは「農業より工業、工業より商業のほうが儲かる。人々は儲かるところに流れていく」と述べた（『政治算術』1690年）。生産するだけ（1次産業）では利益は小さく、販路開拓（第3次産業への進出）して流通利益を内部化したことが発展要因だ。規模拡大農家が法人化し、農協の共販から脱し、自分で直接販売に向かうのはそのためである。

ただし、6次産業化の成功は第1次産業部門の品質に左右される。品質が悪ければ、販路開拓できないからだ。れんこん三兄弟は美味しく、害のないものを供給するため、土壌診断、土壌管理、製品分析は欠かせない。肥料も初期は有機肥料、追肥は化成のコーティングを使い、また農薬は一切使っていない。確かに、ハス田を見ると、ジャンボタニシ、ザリガニ、ドジョウがいる。安全な証拠だ。これこそ先進国型産業への道であり、中国産輸入品との競争への切り札だ。

④ カモはレンコン収穫名人

収穫作業は意外に難しく、掘り穫

りは長年の経験が必要、3年かかる。レンコンはハスの地下茎であり、泥水の中にある。手探りでレンコンを収穫するわけだが、どの葉の下にレ

ンコンが実っているか、熟練するとわかってくる。栄養成長段階と生殖成長段階で葉の大きさが違う。大きい葉は光合成中であり、隣のちよつと小さい葉の下にレンコンが実る。貴夫氏は「土の中のレンコンを透視できる」といい、もはや「名人」の域に達している。

ハス田を見せてもらって、意外に思った。レンコンは台風弱いという。水面下にあるのに「なぜ？」と思った。葉が大きいので風の被害を受けやすく、生育中に強風が吹くと全滅する危険がある。年によって価格変動が大きいのはそのためである。主産地の徳島県等が台風の通り道だからだ。霞ヶ浦は台風被害が少ないので、市況上昇の恩恵を受ける。

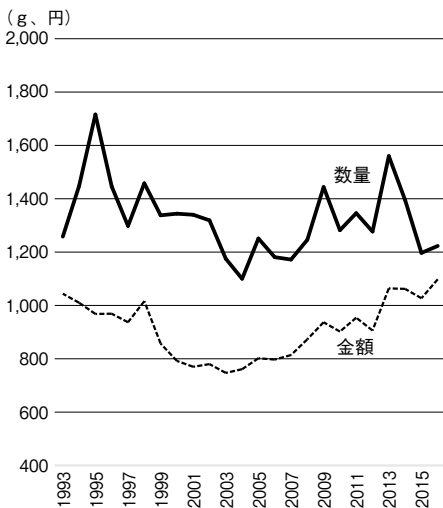
もう一つは、ハス田はネットが張られている。これも「？」であった。水面下の土中にあるにもかかわらず、カモが食べる被害を防ぐためだ。しかし、逆に言うと、カモはレンコン収穫の名人といえよう。先に、レンコン掘りは素人には至難の技で、熟練が必要と述べた。カモは子供でもレンコンを掘り当てる。カモに学べないか。

レオナルド・ダ・ビンチはトンボの空中停止（ホバリング飛翔）からヘリコプターの原理を考案した。日本の500系新幹線の先頭の流線形

第5回

新規就農者目白押しのレンコン産地
(株れんこん三兄弟 & JA土浦 (茨城県霞ケ浦周辺))

図3 レンコン消費の推移 (1世帯当たり)



(資料) 総務省統計局「家計調査年報」(二人以上世帯)

表2 レンコンの成分 (可食部100g当たり)

	レンコン	さつまいも
ビタミン C(mg)	48	29
カリウム(mg)	440	480
食物繊維(g)	2.0	2.2
ムチン	◎	
タンニン	◎	

「日本食品標準成分表」2015年版(七訂)による。

新しい動きが出ています。健康ブームで注目され、外食やデパ地下で売られている。免疫力を高める食べ物という評価が高い。食物繊維のほか、風邪予防薬や花粉症対策の漢方薬としての期待も出ている。ムチンは納豆のネバネバ成分と同じで胃の粘膜を保護する。カリウムは高血圧を予防改善する効果がある。

⑤ 10年後の目標は50ha

は、カワセミの水中飛込みからヒントを得た。つまり、バイオミミクリだ(生物に学び模倣した技術)。レンコン収穫も、カモに学ぶことは出来ないだろうか。そこから、先端技術が生まれる。

(注) バイオミミクリ(biomimicry)については拙稿「中国雲南省紀行(その2) 中国雲南省の生物多様性戦略」2011年9月28日参照。
http://money.rinikabu.jp/24168

用途も広がっている。レンコンの旬は冬で、正月のお節料理の定番食材であるが、最近は夏にサラダで食べることも多い。れんこん三兄弟も、ペーストにして、デザートに使う計画を持っていて、新しい用途が拡大しており、成長産業になりそうだ。「需要が増えると大化けの可能性もある。さつまいもはどこでも作れるが、レンコンの供給は限られており、価格が上がる」(貴夫氏の期待)。用途がなくエサ米に走っているコメとは大違いだ。

品種改良にも新しい動きがある。レンコンの品種はレンコン生産者など民間育種家が育成したものがほとんどであるが、優良系統の選抜と普及に関して新しい取り組みが進み始めた。現在ある品種の中から「機能性」の高いものを選抜するため、「国産レンコンブランド力強化コンソーシアムプロジェクト」が2016年下(19年上期計画で発足した(茨城大学+茨城県園芸研究所+茨城県生物工学研究所+徳島農業試験場+東京大学+かずさDNA+生産者(3戸))。それより先、茨城県は「収量性」の高いものを選抜するため、「いばらきレンコン優良系統選抜普及プロジェクトチーム」を設置し、優良系統の選抜と普及に取り組んできた(13~17年度)。

筆者は「さつまいもは成長産業になる！」と持論を展開しているが、レンコンはさつまいもより成長産業化の可能性が大きい。貴夫氏は筆者仮説をもじって「第2のさつまいも」と言うが、研究開発体制がしっかり組まれているので、レンコンのほうが先に成長産業になりそうだ(さつまいもはブームであって、R&D体制の強化はない)。時代の転回が、レンコンを成長産業に押し上げようとしている。

稲敷市浮島にはハス田が150haある。レンコン農家は60~70戸。農家サイズは10ha規模が4戸、あとは2~3haである。三兄弟の目標は「離農農家からの借地と水田転換で、10年後、50haを目指す。地区の3分の1はうちがやりたい」(貴夫氏)。売上は5億円か。ベンチャー企業だ。

課題は人である。レンコンは農業内部での地位が低く、従業員を募集しても応募者がいない。そのため、外国人実習生への依存も始めたようだ。レンコンの地位向上が当面の課題のようだ。しかし、成長産業になれば、この課題は自ずと解決していく。

日本一のレンコン産地はJA土浦管内(土浦市+かすみがうら市)である。図4は、JA土浦のレンコン販売の推移である。数量、金額とも成長している。先に表1に示した茨城県全体よりも、JA土浦のほうが伸び率が大きい。

(注) 本データはJAの共販であって、4割を占める個人出荷は含まれていない。

レンコン産地は、後継者が多い。レンコンは儲かるからだ。近年は価格も上昇傾向にあり、1ケース(4kg)2000円とすると、10a当たり450ケースで売上90万円になる。コメの粗収入の8倍だ。3ha経営すれば、3000万円近くになる。当地は離農があっても、水田として借りる人はいない。ハス田にしているなら借りる。借地料は、基盤整備

課題は人である。レンコンは農業内部での地位が低く、従業員を募集しても応募者がいない。そのため、外国人実習生への依存も始めたようだ。レンコンの地位向上が当面の課題のようだ。しかし、成長産業になれば、この課題は自ずと解決していく。

日本一のレンコン産地はJA土浦管内(土浦市+かすみがうら市)である。図4は、JA土浦のレンコン販売の推移である。数量、金額とも成長している。先に表1に示した茨城県全体よりも、JA土浦のほうが伸び率が大きい。

⑥ 日本一のレンコン産地
JA土浦

第5回

新規就農者目白押しのレンコン産地
(れんこん三兄弟 & JA土浦 (茨城県霞ヶ浦周辺))

茨城県のハス田は10a当たり5万円もする。条件の悪いところでも、2万〜3万円もする。これに対し、コメ作りの水田は無料で借りられる地域も多い。

もう一つの要因は、レンコンは収穫の作業適期が広く（8月〜翌年3月）、自由に休暇が取れる。1週間休んで海外旅行に行くこともできる。ハス田で出荷調整できるのだ（倉庫不要）。つまり、高付加価値、高収入、しかも自由時間が取りやすい。そういう意味で、若者に向いた農業である。そのため、レンコン農家は後継者が多い。

表3に示すように、レンコン産地の旧上大津村、下大津村は基幹的農業従業者の年齢構成が若い。15〜49歳の割合（「新規就農者調査」と同じ年齢区分を使った）は、茨城県平均が6〜7%に対し、レンコン産地の両村は2倍の11〜12%もいる。つまり、若い人が就農している。平均年齢で見ても、茨城県の67歳に対し、両村は63〜64歳である。これは新規就農者が多いことを反映したものである。

実際、茨城県市町村別新規就農者統計によると、土浦市の新規就農者数（39歳以下）は平成18〜27年度で68名いる。販売農家数（15年農林業センサス）に対する新規就農者比率

は5・7%で、県平均の3・3%の2倍近くも高い。

収益率の格差が大きいため、水田をハス田に転換する動きも多い。土浦市の調査によると、他の作物からレンコンへ転作された面積は、この7年間（10〜16年）で38・9haに上る。16年のレンコン作付面積は479haであるから、その8%は最近7年間に水田等からハス田へ転換されたものである。

⑦ 系統外の農家も多い

レンコンは成長産業になる。ただし、規模拡大には限界が出よう。規模拡大は離農家からの借地と、水田のハス田への転換という二つの要因があるが、後継者が多いため、離農要因が弱くなるからである。特に土浦周辺は都市に近く（霞ヶ浦南部に比べ）、若者の後継者が多いから、規模拡大は限界に近づいている。

組織に依存しない農業経営者も多い。JAの共販率は約6割と推定される。地域のレンコン作付面積は870ha（土浦市480ha、かすみがうら市390ha）であるが、JA蓮根部会は530haであり、約6割である。残り4割は、JA組合員ではあるが、レンコン専門問屋への出荷や系統外出荷（直売など）である。特別な栽培で高付加価値を目指す農

業経営者は農協系統の外に出る。例えば、希少品種「あじよし」は高く売れるので、共販に参加しない。

ただし、JA共販は価格が安いとは限らない。第一に、JA土浦の共販は品質基準を厳しくしている。また、JA土浦は日本一の産地としてロットを持っており、大手量販店（大ロット取引）への対応も可能なので、むしろ販売価格は高い。個人出荷で大田市場や築地など卸売市場に出荷している小規模農家たちはJA共販価格より1割くらい安いようだ。

レンコンは成長産業になる可能性が大きい。しかし、高収益は輸入を招きやすい（特に加工用）。国内のレンコン産地の成長を確実なものにするには、美味しく安全なものを作り、その上に、トレーサビリティを確保することが必要であろう。

図4 JA土浦のレンコン販売推移

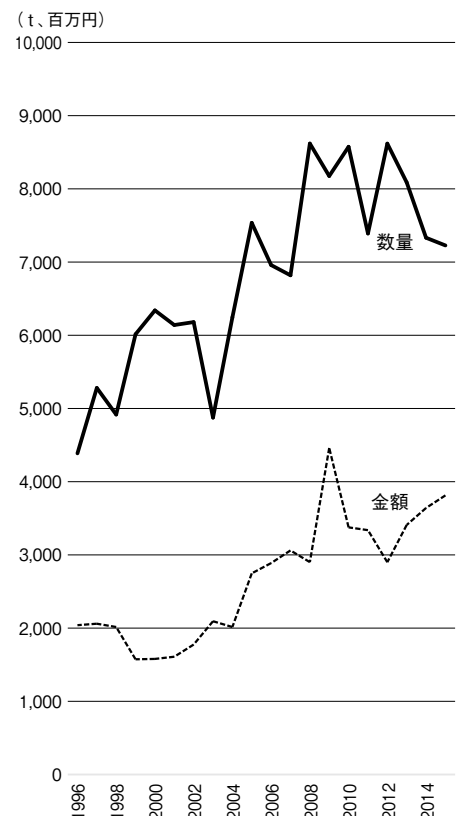


表3 基幹的農業従事者（販売農家）の年齢構成の比較

(単位：人、%)

	男女計	15〜49歳	同左%	平均年齢(歳)	
				基幹的従事者	農業専従者
茨城県	76,821	5,350	7.0	66.8	64.0
土浦市	1,929	145	7.5	67.0	65.0
上大津村	620	73	11.8	63.3	61.1
かすみがうら市	2,201	143	6.5	67.2	64.8
下大津村	286	31	10.8	64.5	62.8

(資料) 2015年農林業センサス。
(注) 旧上大津村、下大津村はレンコンの主産地である。

(資料) JA土浦調べ